12. 陳旧性心筋梗塞における silent myocardial ischemia の検討

板野　緑子　成瀬　均　川本日出雄
山本　寿郎　福武　尚重　森田　雅人
大柳　光正　岩崎　忠昭　（兵庫医大・一内）
福地　稔　（同・核）

われわれは，silent myocardial ischemia の Tl-201 心筋シンチグラフィーにおける特徴について報告してきた．今回は，心筋梗塞後における silent myocardial ischemia において，心筋シンチグラフィーにおける特徴を明らかにする目的で，回復期および陳旧性心筋梗塞70例に対して，Tl-201 運動負荷心筋シンチグラフィーを行い，以下の3群に分類した．CP 群：運動負荷時に胸痛を伴う，虚血性の心電図変化のある例 (n=12). SI 群：運動負荷時に胸痛を伴わない，虚血性の心電図変化のある例 (n=31), Control 群：十分運動負荷を行ったにもかかわらず心電図変化のない例 (n=17). ただし胸痛や心電図変化の明らかでない10例は除外した．これらの各群間で視覚的には，再分布の有無および血流低下の程度，定量的には局所の washout rate (WR) を比較検討した．結果：再分布の頻度は3群間で差がなかった (CP 群：2/12, SI 群：9/31, Control 群 4/17). 心筋イメージ上，高度の灌流低下または完全欠損を示した例は，Control 群 (11/17) と比較して，CP 群 (5/12) では差がなかったが，SI 群 (9/31) では少なかった ($p<0.05$). 局所の WR は CP 群：21.8±16.0%, SI 群：36.2±11.5%, Control 群：38.3±12.0% と，CP 群のみ低値であった ($p<0.05$). また，各群間で年齢，糖尿病の有無，冠動脈の罹患枝数や部位に差はなかった．以上より心筋梗塞後の silent myocardial ischemia は，Tl-201 心筋シンチ上灌流低下が軽度の場合が多く，有痛性の場合と比較して WR は高値であり，虚血の程度が軽度であると考えられた．しかし，高度の灌流低下をきたし WR が高値であった一部の症例はむしろ高度の虚血と思われ，silent myocardial ischemia は単一の病態ではなく，軽度および高度虚血の両者が存在すると思われた．

13. 急性心筋梗塞に対する血栓溶解療法の運動負荷心筋シンチグラフィによる評価

大西　卓也　馬淵　順久　浜田　辰巳
松本富美子　小野　幸彦　大草　昭彦
播野　賀子　藤井　広一　吉岡　寛康
熊野　町子　石田　修　（近畿大・放）
清水　稔　石川　欽司　香取　瞭
（同・一内）

運動負荷心筋シンチグラフィは，狭心症の診断に広く使われている．心筋梗塞において梗塞内の瘢痕部には再分布は認められないことより，再分布現象には梗塞部心筋の viability が反映していると考えられている．

今回，初回心筋梗塞患者で，急性期心臓カテーテル検査にて1枝病変が確認され，慢性期には再開通が認められた58例について，慢性期に運動負荷心筋シンチグラフィを施行し，冠動脈内血栓溶解療法群 (PTCR 群)，ウロキナーゼ静注療法群 (IVCR 群) および自然経過群 (Non-UK 群) に分類し，梗塞部再分布の評価を行った．

PTCR 群では19例中10例に，IVCR 群では8例中4例に再分布が認められたのに対して，Non-UK 群では31例中9例にしか再分布は認められなかった．

血栓溶解療法群は自然経過群に比べて再分布の出現が有意に高く認められ viability の残存に寄与するものと考えられた．

PTCR 群と IVCR 群との間には有意差は認められなかった．

IVCR は特別な設備を必要とせず，一般病院でも施行可能なため，急性心筋梗塞に対する有効な治療法と考えられる．

14. 運動負荷心筋シンチグラフィにおける diffuse rapid washout rate の解析

山上　英利　西村　恒彦　林田　孝平
植原　敏勇　三谷　勇雄　汲田伸一郎
起塚　裕美　（国循セ・放診部）

運動負荷心筋シンチグラフィにおいて，心筋全体の washout rate (WR) が異常に亢進している例をみることがある．このような diffuse rapid washout rate (DRWR) を呈する症例につき，その要因を検討した．対象は最近約6か月間に運動負荷心筋シンチグラフィを施行した連

Presented by Medical*Online